

銀座街づくり会議

http://www.ginza-machidukuri.jp

〒104-0061 中央区 銀座4-6-1 銀座三和ビル3F

Tel: 03.3567.1535 / Fax: 03.3563.0236 / E-mail: info@ginza-machidukuri.jp

\*メール配信をご希望の方はお知らせください\*このNewsLetterは、全銀座会会員、銀座街づくり会議関係者の方々にお送りしています\*本誌の内容を、許可なく無断で複写・複製および転用・転載することを禁じます\*

読売新聞内の隈研吾氏隔月企画「東京ミライ」にて、銀座の路地とまちづくりが紹介されました。

2019/10/31 読売新聞 (朝刊)

建築家 隈研吾 × 銀座

「村」的な細やかな関係

路地を、「らしさ」を守る

建築家、隈研吾さんが東京を歩く隔月企画「東京ミライ」。今回は、日本を代表する商業地・銀座の路地から、この国が進めていくべきまちづくりのあり方に思いを巡らせてもらった。

■その裏、獣道

高級ファッションブランド店や宝飾店、百貨店が並び、買い物客や観光客が行き交う。銀座通りのきらびやかな雰囲気は、一般的な銀座に対するイメージだろう。しかし、それは表層にすぎず、裏にはディープなものがひっそりと存在している。その一つが路地だ。

江戸時代に整備された銀座では、明治期以降、煉瓦街の建設、関東大震災や第2次世界大戦後の復興期など、様々な機会に路地が形成された。

土地を最大限に利用したいが、技術的に敷地をいっばい使ってビルを建てることはできない。いくらか隙間を作って建てることになる。その、人がすれ違えないほどの隙間が、路地になったりしたのだろう。

そんな路地の入り口を観察していると、あまり間を置かずに人の出入りがある。和服姿の日本料理店の従業員、ビールなど飲料品のケースを台車に載せた配達員……。路地をのぞき込むと、昼間なのに夜のように暗い

が、みんな慣れた感じで歩いて行く。路地を通り抜けてみて気づいたことは、段ボールやプラスチックケースなどが置かれていないことだ。複雑な路地に見えながら実はちゃんと人が通行できるように管理されている。路地に稲荷神社があることも多いが、どれも手入れが行き届いている。

銀座の路地はまるで獣道のようにだ。誰かに与えられた道ではなく、自分たちの小道を作りたいう、動物としての本能的なものを感じた。クラブやバーといった奥行きと趣のある夜の文化にも路地は影響しているのだろう。

さらに、道を塞ぐビルの自動ドアを開いて喫茶店を突っ切って通る路地や、ビルの中に埋め込まれるように存在する路地もある。こんな都市構造もあるのかと驚かされる。同時に、日本人には小さい空間に価値を見出す能力があり、令和の時代になっても脈々と受け継がれていることが分かる。

銀座は老舗もあるが、店舗の入れ替わりも活発だ。新陳代謝をしながらも、町会や通商會、業界団体が連携した組織「全銀座会」を作り、まちづくりの方針を決めている。こうした顔が見えるきめ細かい「村」的な人間関係を維持してきたことで、一朝一夕にはできない銀座ブランドが育まれた。個人商店や中小企業が果たす役割は大きい。

ブランド力を利用しようと考えているブランドなど匿名性の高い大資本も少なくない。大規模開発をして、短期的に利益を追求し、流行が去ったら次の場所に移っていく。1985年のブラザ合意以降のそうした「焼き畑農業」的な開発が、世界の都市を荒廃させた。グローバル化する中で、銀座でもその圧力は高まっているが、銀座らしさを損なう開発を防ごうと、全銀座会が行政(中央区)と協議して98年に決めたのが「銀座ルール」。歌舞伎座タワーのように、一部の地域で文化の維持・継承に貢献する建物に限り例外は認められるが、ビルの高さは道幅に応じて制限され、最高でも56層と定められている。

■日本の試金石

そのおかげで景観保全だけでなく、路地も守れるというのが重要だ。超高層ビルには広い敷地と空地が不可欠で、小規模ビル何棟分かの敷地をまとめて確保することになる。しかし、高さに制限があれば、土地の集約ができずに、ビルの隙間の路地が残る可能性が生まれる。

個人商店や中小企業は、何とか銀座で頑張っていこうと必死である。土地に根を張り、有機的な人間関係を築きながら銀座らしさを支える彼らの存在は「宝物」だ。しかし、一等地であるがゆえに固定資産税や相続税など重税にあえいでいる。経済原理だけで淘汰してしまっ

はいけない。銀座らしさが消える危機を乗り越え、経済優先の20世紀的な尺度からどう脱皮していくかを考えていかなければならない。これは銀座だけの問題ではない。規模の違いはあるが、地方都市でも起こっている、あるいは将来起こりうることなのだ。

日本はどこへ進むのか。銀座はその試金石になっている。現代の日本に生きる私たち自身が問われている。